



『はじめて学ぶ 社会調査 リサーチマインドを磨く8つのレクチャー』

著：徳田 徹

A5 版・176 ページ

定価：2,100 円(本体 2,100 円+税 5%)

発行：慶応義塾大学出版会 (TEL03-3451-6926)

社会調査の基礎を学べる初学者必携の書

評者◎石井京子 前・大阪市立大学大学院看護学研究科教授

米国社会学会機関誌の7割が計量分析を用いた論文であるとされるように、近年、科学的な検証を目的とした社会調査が多用されるようになり、問題点も指摘されている。我々の社会においても、方法の簡便さゆえに、ちまたには質問紙調査(俗にアンケート)があふれているが、多くの人に何かを問えばそこからなんらかのデータが得られ、パソコンを活用しデータ分析を行なうと、いかにも科学的な意味づけがなされたように思われてしまう。しかし、社会調査は目的や、普遍性や一般化を明らかにすることをめざしたものでなければ、調査としての意味づけは乏しいといわざるを得ない。そのため、調査を行なおうとする場合には、何のための調査か、何を明らかにしようとするのかをまず考える必要がある。

このように、社会調査とは、社会事象についてのデータを収集し、得られた情報の質的量的処理も踏まえて、妥当性・信頼性の高い結論を導くことで、対象である人間の意識や態度を明らかにし、そこに内在する因果関係を類推することである。そのため、社会調査を行なうには正しい方法を理解し、対象の無作為抽出、適切な質問、回収率などに留意することが基本となる。その結果、社会に有用であること、客観的であること、仮説検証的な可能性をもつこと、一般化できることなどが得られ、科学としての役割を果たすことができよう。2004年には日本でも社会調査士資格制度がつくられ、社会調査への精度向上が求められているのも、その重要性ゆえであろう。

本書はタイトルのごとく、初めて社会調査を始

める人のための入門書として書かれており、その趣旨に沿ってわかりやすく具体的に書かれている。全体は8講からなっており、第1講で社会調査の変遷が述べられているが、調査を行なう人にはぜひ読んでおいてほしいところである。本書の中心的構成であるデータの収集と分析では、量的調査と質的調査の両面にわたってバランスよく解説が行なわれている。

各講の最初にその講の「ねらい」が簡単に述べられており、そこにはどういった内容が記載されているかが読者に理解できるようになっている。また、終わりには「まとめ」として内容的に重要なポイントが箇条書きに整理されていることで、読んだ後の内容整理と理解を助ける働きをしており、初学者にとって親切的構成となっている。

調査実施において近年話題となっている「倫理」の問題にも触れており、倫理原則についての内容を解説するとともに、倫理審査を受けるときの留意点についても具体的に述べられており、参考になろう。

内容が盛りだくさんなので、量的調査を初めて行なう場合は、例題や図表で視覚的に表現されていたら一層理解が進んだかもしれない。また付録のSPSSの操作手順については、最近の学生はパソコンに慣れているので操作をすぐにマスターすると思うが、データ分析の意味を十分に理解してこそそのソフト仕様と思われるので、注意が肝要と思われた。そのあたりは今後に期待するとして、初学者が社会調査に取り組む際には必携の1冊である。